

29Cl-am04

学生に仮説を立てさせ実験させる初年次入門実習の概括

○武田 直仁¹, 大津 史子¹, 加藤 美紀¹, 後藤 伸之¹, 灘井 雅行¹(¹名城大薬)

【目的】本学では6年制カリキュラムで初年次導入教育のひとつとして問題基盤型学習による入門実習を組み入れた。入門実習は、実験器具の適正な扱い方や試液の調製法、レポートの書き方など2年次以降の専門実習に円滑に取り組めることを目標とした4回の基礎実験から構成されており、そのねらいは、初年次から学生に実験・観察を通じた科学観の涵養、学習の動機づけ・学習意欲の維持などを身につけさせることにある。その学習成果を「くすりの剤形」を題材とした実験を一例として過去3年間の学生評価から概括する。

【方法】1時限目に目的・意義などの導入講義を行い課題が与えられる。2時限目にSGL(4名/班)で実験方法やそのためにどんな器具・試薬が必要かなどを考え、実験計画を立案する。3時限目に課題を解決する実験方法について発表をし、4~5時限目に自分たちで考えた実験方法で仮説が証明できるか検証実験をした。成績評価は受講態度・レポート採点とした。

【結果及び考察】全16質問の過去3年間における肯定的評価の平均比率は7~8割であり、入門実習に対する学生満足度は高い。例えば「本実習で薬学への興味が増したか」では86.1±0.26%が「増した」と答えた。『自分たちで実験方法を考えて実験するのは難しかったけど、とても面白かった。またやってみたいです。』といった自由記述に例示されるように、学習を動機付ける信念としての3要素(自己効力感、内発的な価値意識、有意味受容)が薬学への興味の変容につながっていると考えられた。学習者相互の中で新しい価値を創出し、学習者がより能動的な学びを実現する教授方法が求められている中、学習者の「学び続ける力」を育成するための初年次導入教育のプログラムとして、有用性が示唆された。